

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03188

研究課題名（和文）宗教改革期スイスにおける都市共同体の構造に関する社会史的研究

研究課題名（英文）Studies on the Social History of the Reformation and Urban Communities in Switzerland

研究代表者

野々瀬 浩司（NONOSE, Koji）

慶應義塾大学・文学部（三田）・教授

研究者番号：20545793

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：宗教改革期における共同体運動に関する研究史を整理し、都市共同体の内部構造や市参事会の役割などの学術的な論点を明らかにし、スイスのシャッフハウゼン市の文書館で史料を収集した。2019年5月19日に日本西洋史学会第69回大会で、1525年のシャッフハウゼンにおける葡萄栽培者ツunftの反乱について報告し、ツunftの内部において団結や共同体意識が比較的弱かったことを指摘した。2019年10月27日に広島史学研究会大会で、シャッフハウゼンにおけるアラールハイリゲン修道院の解散（1524年）について報告し、市参事会による教会に対する管理・統制が進展し、市参事会の立場が強化されていた事実を明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

伝統的な宗教改革史研究は、神学思想研究や支配層の政治史的分析を中心に行われていたが、社会史研究が登場して以来、多角的な視野で総合的に宗教改革運動が考察されている。本研究は、そのような社会史研究の方法を批判的に踏襲しながらも、スイス固有の地域性や多様性を考慮に入れた歴史的個性を抽出し、一般市民や共同体による下からの運動としても宗教改革を捉えるものである。本研究を通して、公権力やそれに支持された知識人の動向という上からのアプローチと、民衆や共同体の視点という下からのアプローチの両面での新たな実態が明らかになる。

研究成果の概要（英文）：I arranged the history of many past researches about the communal movements of the Reformation in Germany and Switzerland, and clarified important scientific points and subjects, such as the internal structure of city communities and the role of city councils. I collected historical records at the state archive of the Kanton Schaffhausen in Switzerland. At the 69th annual meeting of the Japanese Western Historical Society on May 19, 2019, I reported the rebellion of the Guild of vinedressers (Zunft zum Rebleuten) of 1525 in Schaffhausen, and pointed out that the union of the community and the communal sense were comparatively weak in the inside of the Zunft. At the annual meeting of Hiroshima Society of Historical Research on October 27, 2019, I reported the abolition of the Allerheiligen Monastery of 1524 in Schaffhausen and specified the fact that the superintendence and the control to the church by the city council progressed, and the position of the city council was strengthened.

研究分野：歴史学

キーワード：宗教改革 社会史 スイス 都市 共同体 市参事会

1. 研究開始当初の背景

伝統的な宗教改革研究では、ルター神学の分析などの思想史研究と、皇帝や諸侯の動向を考察した政治史研究が中心であったが、そこには当時の民衆がどのように宗教改革に関与したのかという社会的視点が不足していた。それに対して B. Moeller, *Reichsstadt und Reformation*, Gütersloher Verlagshaus G. Mohn 1962. が公刊されて以来、都市共同体の社会構造と宗教改革神学との親和性が指摘され、宗教改革運動を社会的に考察する新しい道が開かれた。これまで申請者は、宗教改革と農民戦争との関係について考察し、特に農奴制に関わる抗議史料を中心に分析を行い、宗教改革の思想がどのように農村共同体で受容され、農民運動へと発展していったのかについて明らかにした。その研究成果をまとめて、拙著『宗教改革と農奴制：スイスと西南ドイツの人格的支配』（慶応義塾大学出版会、2013年）と同『ドイツ農民戦争と宗教改革：近世スイス史の一断面』（慶応義塾大学出版会、2000年）などの研究書や論文で発表してきた。さらには16世紀の農民運動の中で表れた自由の概念を分析し、その共同体的性格を明示した（『一橋論叢』第122巻第4号（通巻708号）、1999年）。農村共同体における宗教改革の受容の問題に関する研究は、1980年代頃からブリックレとその学派の人々によって精力的に試みられ、そしてメラ一説などの都市に関する研究成果も取り入れられて、都市と農村の共同体を総合的に見る「共同体宗教改革論」が提示された。そのような農村研究で得た成果を踏まえた上で、今回は分析対象を都市へと変更して、共同体的社会構造と宗教改革との関係について考察し、さらには宗教改革によって共同体と個人の関係が構造的にどのように変遷し、それが近代的な市民社会が成立するにあたって、どのような意味を持ったのかについて分析したい。それによって得られた研究成果は、共同体の持つ基本的特質を近世に遡って分析することに繋がり、ヨーロッパ各地にある共同体の総合的な比較研究のための新しい重要な素材を提供するものである。

宗教改革の社会思想と都市の共同体的な社会構造との親和関係を指摘したメラ一説に対しては、(1)帝国都市以外の都市（例えば北ドイツの領邦都市など）でも妥当する可能性、(2)ツンフトや教区などの共同体よりは市参事会が主導した事例、(3)統治者を含めて共同体を一体として見ることに對する疑問や共同体内の階級対立の視点の不足、(4)ルター以上にツヴィングリの思想的影響を強調しすぎたという問題性、(5)農民戦争などの民衆運動が宗教改革の進展を遅らせたことと見なした点、(6)外交的な情勢の考慮不足などが主な批判点として提示されている。かつて申請者も、宗教改革が挫折したスイス北西部のゾーロトゥルンを事例にして、16世紀前半における都市研究を行い、(1)都市共同体内の社会的対立、(2)ベルンやバーゼルなどの近隣諸邦からの外交的影響、(3)中世末における都市当局による教会財産の国有化や聖職者への管理・統制の展開、(4)都市よりも早い時期に農村での宗教改革受容が進展していた事実などを指摘し、メラ一説の部分的修正を提示した（『ゾーロトゥルンの宗教改革とその挫折』（『史学』第73巻第2・3号、2005年）。本研究では、ゾーロトゥルンのように宗教改革が挫折した事例ではなく、都市国家としてほぼ十全な政治的自治を獲得していたスイス盟約者団内の自由都市であるシャフハウゼンを対象として、そこで宗教改革が導入されていった諸要因を解明する予定である。15世紀末以来神聖ローマ帝国から事実上政治的に独立していたスイスの自由都市では、ドイツの諸都市以上に帝国内での外交関係にはあまり左右されずに、共同体による自治的な要求が制度化されやすいので、この地域の宗教改革を研究することは、共同体の特質を理解する際に重要な素材を提供する。また既に申請者は、シャフハウゼン周辺地域の農村研究を部分的に行い、その成果を論文として公刊しているので（『近世スイスにおける領邦国家の形成 農民戦争期のシャフハウゼン』（舘共二・岩井隆夫編『スイス史研究の新地平 都市・農村・国家』昭和堂、2011年）。その内容を参照しながら、宗教改革期における都市と農村の関係についても分析する。

日本でのスイス史研究は、まだジュネーヴとチューリヒなどの主要都市に偏った発展途上の段階にあるので、それ以外の地域の歴史研究を行うことによって地域的に多様な歴史の実態が明らかになることは、スイスと日本との間の相互理解と文化交流を促進するものと思われる。特に日本における従来の西洋史研究では、スイス史がドイツ史の一部として扱われることが多かったが、本研究は、諸侯が主導権を握っていたドイツの宗教改革とは異なった、スイス固有の独自性・特殊性を浮き彫りにする。スイスでは今日でも地域的に多様な文化が根強く併存しており、歴史研究を行う際には、一般的な歴史理論やモデルを創出することよりも、むしろ地道な実証研究を通じて、そこから抜け落ちた各地域の歴史的個性を抽出することに独創的な意義があると思われる。また、日本のヨーロッパ・キリスト教史研究においては神学研究と歴史研究との間に学術的な交流があまり頻繁にはなされていないため、それぞれの研究成果が相互に参照されることが少なかった。とりわけ歴史研究においては、キリスト教の社会思想に関する深い理解を目指したものが、総体的に乏しい現状にある。そのような問題に対して、本研究を通して、ヨーロッパにおいて宗教思想がどのような形で社会に影響を与えたのかについて考察することは、神学研究と歴史研究によって得られた個別の成果を関連づけ、16世紀という時代の総合的な把握をもたらす、キリスト教自体の本質をより幅広く理解するために大きく貢献することは間違いない。

2. 研究の目的

これまで申請者は、宗教改革期の社会思想と農村共同体に関する研究を行ってきたが、その成果を土台にして、今回は分析対象を16世紀の都市共同体へと拡大する。つまり本研究の主目的は、スイスの自由都市シャフハウゼンにおける宗教改革の導入を事例として、共同体の役割とそ

の構造について実証的に明らかにすることにある。この研究を通して、宗教改革によって共同体と個人の関係が構造的にどのように変化し、それが近代市民社会の形成に際してどのような意味を持ったのかについて考察する。そのことは、今日における共同体の基本的特質を16世紀に遡って分析することに繋がり、世界各地にある共同体の構造的な比較研究のための新しい重要な素材を提供し、さらには神学研究と歴史研究の学術交流を促進するものである。

3. 研究の方法

本研究ではスイスのシャフハウゼン市を事例として、宗教改革の導入に際して都市共同体や市参事会がどのような役割を果たしたのかについて、社会史的あるいは宗教思想的に考察する。そのためには、まずドイツとスイスにおける諸都市の宗教改革に関する個別的な研究史を整理して論点を抽出する。そして中世末から16世紀初頭までのシャフハウゼン市の社会構造・政治体制・経済状況などを明らかにし、日本で入手できる刊行史料に加えて、スイスの文書館などにおける未刊行史料の収集・分析を行う。そのような作業を通して、シャフハウゼン市が宗教改革を受け入れた原因・背景・経過やその導入後の政治体制・社会構造・民衆心性の変化について解明し、この時代の共同体の特質とその変化について言及する。

伝統的な宗教改革史研究は、神学思想研究や支配層の政治史的分析を中心に行われていたが、社会史研究が登場して以来、多角的な視野で総合的に宗教改革運動が考察されている。本研究は、そのような社会史研究の方法を批判的に踏襲しながらも、スイス固有の地域性や多様性を考慮に入れた歴史的個性を抽出し、一般市民や共同体による下からの運動としても宗教改革を捉えるものである。本研究を通して、公権力やそれに支持された知識人の動向という上からのアプローチと、民衆や共同体の視点という下からのアプローチの両面での新たな実態を明らかにする。そのような実証研究を通して、宗教改革期に共同体と個人の関係が構造的にどのように変化し、それが近代市民社会の形成に際してどのような意味を持ったのかについて解明する。それによって得られた研究成果は、世界各地にある共同体の時代的・地域的差異や共通性を明らかにし、共同体の特質に関する比較研究のための豊富な素材を提供することに繋がる。

4. 研究成果

(1) ドイツとスイスにおける諸都市の宗教改革に関する膨大な量の個別研究を整理して、メラーの議論をもとに論点を取り出し、以下のようにまとめた。宗教改革の都市共同体の内部構造に関して、メラーのように「聖なる共同体」としての均質な構成員からなる都市共同体の一体性を主張できるのか、つまりその中には階層対立が存在しないのか。市参事会は、本当に都市の宗教改革運動を抑える方向に機能し、その役割を低く位置付けるべきか。メラー説の適用範囲は、南ドイツやスイスの自由都市やツンフト体制都市だけではなく、北ドイツの門閥体制都市や領邦都市にも拡大できるのではないかと。さらにはメラーが展開した議論には、農村共同体の宗教改革運動にもあてはまる部分があるのではないかと。メラー説では、都市の宗教改革におけるツヴィングリや改革派の思想的影響が強調されているが、ルターの社会思想が過小評価されているのではないかと。メラーは、都市の宗教改革における共同体運動が1540年代後半から衰退したと見ているが、そのような時代区分は、16世紀後半に第二の波があったという反論を受けている。その他に外交史的側面や女性の役割が軽視されているのではないかとという点に関しても、簡単に言及した。その内容は、次の箇所に公刊された。拙稿「宗教改革と都市共同体 ベルント・メラー説をめぐって」(『思想』第1122号、岩波書店、2017年9月26日、24-45頁)。

(2) キリスト教文化協会から依頼を受けて、2017年6月21日に教文館9階ホールで「ルターの戦争観と現代」という題名で講演を行い、戦争観を中心にルターの社会思想全般を考察した。ルターが中世の聖戦思想を否定し、戦争への参加と贖宥との結びつきを否定し、戦争の世俗化を推進したことを指摘したうえで、中世の正戦論との思想的関連性も明示した。このことは、ルターの社会思想を多角的に把握し、都市の宗教改革史研究にも役立つものと思われる。その内容は、次の箇所に公刊された。拙稿「ルターの戦争観と現代」(日本キリスト教文化協会編『宗教改革500年記念講演集 宗教改革の現代的意義』教文館、2018年6月30日、119-160頁)。

(3) 2017年6月24日の三田史学会大会において、「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義500周年に寄せて」と題する総合部会シンポジウムを企画し、三人の研究者に講演を依頼し、その司会者として議論をまとめた。講演者とその題名は、森田安一「ルター肖像画とルター改革の動向」、西川杉子「ルターを引き継いで 17・18世紀プロテスタントたちの連帯運動」、

田上雅徳「教会を持続させた運動 政治思想的考察」であり、このシンポジウムは、幅広い視点で宗教改革全般に対する理解を深め、都市共同体と宗教改革の関係に関する実証研究にとっても意義があるものとなった。その内容は、次の箇所に公刊された。「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義500周年に寄せて」(『史学』第88巻第1号、2018年12月、71-148頁)。

(4) 2017年12月9日に「キリスト教史学会・東日本部会」から依頼を受けて、「ドイツにおける宗教改革と農村社会 ペーター・ブリックレの「共同体宗教改革論」をめぐって」という題名で講演を行い、ペーター・ブリックレとメラーによる宗教改革期の共同体運動理解における共通点と相違点を指摘した。両者の共通点としては、構成員の均質性を強調し、共同体内部の階級対立にあまり重点を置かないこと、南ドイツやスイスの事例を共同体運動の典型例としていること、共同体運動にはルターよりもツヴィングリや改革派の思想的影響をより強く見ていること、女性の役割をあまり重視していないことなどが挙げられる。相違点としてはメラーが都市と

農村の共同体運動の間に、識字率などを基準に断絶面を見ているのに対して、ブリックレは両者の間に連続性や類似性を指摘していることが提示された。その内容は、次の箇所に公刊された。拙稿「研究ノート：ドイツにおける宗教改革と農村社会 ペーター・ブリックレの「共同体宗教改革論」をめぐって」(『キリスト教史学』第72集、2018年7月、104-123頁)。

(5)2019年5月19日に静岡大学において開催された「日本西洋史学会第69回大会近世史部会報告」で、「近世スイス・シャフハウゼンにおける葡萄栽培者ツンフトの反乱(1525年)について」という題名で研究報告を行い、スイスでの史料収集の成果の一部を発表した。シャフハウゼンの宗教改革運動は、1522年頃までは知識人を中心とした少数者の活動にとどまっていたが、フランチェスコ会出身の説教師S.ホフマイスターの活動の影響のもとに、次第に都市市民衆の中に改革派の支持者が増加していった。最終的にシャフハウゼン市が正式に宗教改革を導入することになったのは、1529年9月のことであったが、その途中で宗教改革運動は大きな挫折を経験した。つまり、1525年のドイツ農民戦争に連動して、市内で葡萄栽培者ツンフトの反乱が勃発し、その鎮圧後、首謀者や改革派の説教師が処罰されたのである。ツンフト体制都市であったシャフハウゼンにおいて、なぜ葡萄栽培者ツンフトの構成員が、市参事会での議員選出権などの政治的な発言権を有していたにもかかわらず、市当局に対して武装蜂起を行ったのかについて明らかにした。

反乱の原因としては、まず経済的な問題、つまり雷が降り、前年の葡萄が不作であったことが挙げられ、それに対する土地領主の対応に強い不満が認められた。元来、葡萄栽培者は農民との深い関係を持ち、農民運動の影響を受けやすい状況にあった。蜂起に参加した漁師や船乗りは、市外の同職関係者との深い交流や経済活動を有し、市外から改革思想の影響も受けていた可能性があった。シャフハウゼン市内よりも一部の農村の方が、共同体宗教改革運動が進展していた可能性が高く、聖職者に対する強い反感、反教権主義や教会批判が運動を後押しした。市政を主導していた都市貴族への不満と、葡萄栽培者ツンフトの地位の低さへの反発も看過できない問題であり、これは、形式的平等の原理が、実質的不平等な実態を克服することができなかったことに対する憤りを意味した。運動の特徴としては、葡萄栽培者ツンフト内部では親方、職人、徒弟の関係が緩く、その団結や共同体意識が比較的弱かったことが指摘できる。ツンフト長の姿勢とは異なり、ツンフト構成員は強い抵抗なしに武装を解除した。蜂起の時に市外で労働していた者もいた。このように運動の計画性が不足していたことは顕著に見られた。これは、ある意味では未成熟な形で流産した共同体宗教改革運動と規定できる。農民が最終的な蜂起にあまり多くは参加しなかった要因としては、まず反乱が計画的ではなく、事前に十分に知らされていなかったことが考えられる。葡萄栽培者の側も、農民を完全に信頼してすべてを打ち明けて共闘する意識を十分には持っていなかった。農民が市外から駆けつけても、市門が閉ざされていたことに見られるように、迅速な行動をした市参事会の対応とは対照的であった。西南ドイツでの農民運動が下火になりつつあったことも、農民たちが蜂起に合流しなかったことと関係していた。農民は自分たちを支配する者同士の間での争いという側面を強く感じ取っていたと思われる。確かに葡萄栽培者の要求には、農民たちが求めていた内容と一部重なるものが認められるが、しかしながら「箇条書」には領邦国家の農村支配、共有地問題、農奴領主制や裁判領主に関わる問題などは言及されず、農民と市民が対等な政治的権利を獲得するような思想は見られなかった。メラー説の有効性については、農民戦争や社会運動が宗教改革の進展を妨げ、重要な支持者を多く失ったこと、宗教改革に対する市参事会の保守性、人文主義者から改革思想が市内に流入した点などにおいて、それは部分的に妥当しい。都市の宗教改革と農民運動との連続面と断絶面の両方が認められ、メラーとブリックレの主張は、相互に部分的に有効であると考えられる。

(6)2019年10月27日に広島大学東広島キャンパスにおいて開催された「2019年度広島史学研究会大会西洋史部会」で、「近世スイス・シャフハウゼンにおけるアラーハイリゲン修道院の解散(1524年)について 宗教改革前史をめぐる一考察」という題名で研究報告を行い、スイスでの史料収集の成果の一部を発表した。アラーハイリゲン修道院は、シャフハウゼンの旧都市領主であり、当時市内に存在していた強力な宗教勢力として、都市の自由と自治と敵対し、郊外に多数の封建的な領主権を保持していた。シャフハウゼンで正式に宗教改革が導入されたのは1529年9月のことであったが、その5年前にアラーハイリゲン修道院が解散し、Propsteiに移行するという出来事が発生した。本報告では、これにはどのような背景があったのか、そしてこの事件が、シャフハウゼンの宗教改革の進展の中で、どのように位置づけられるのかについて実証的に考察した。

旧アラーハイリゲン修道院にとっては、下級裁判権などの多くの権限が削減され、さらには教会裁判権と教会法の適用範囲が縮小された。つまり、アラーハイリゲン修道院は、司法的・政治的な権限を大幅に喪失し、政治的な意味ではシャフハウゼン市当局に従属させられた。しかし、土地領主権などの一部の封建的領主権は存続し、旧アラーハイリゲン修道院の経済的基盤はほぼ確保されている。恐らくシャフハウゼン市参事会内の有力者やその親戚がその問題と関わっていたと推定される。これは、カトリック教会にとどまりながらも、シャフハウゼン市参事会による教会に対する管理・統制が進展したことを意味する。改革派の思想的特徴である信仰義認、聖画像廃棄、聖人崇敬の否定などの思想は、全く認められなかった。確かに一年後の農民戦争期における農民や葡萄栽培者の要求と重なる内容もあるが、改革派支持者にとっては、小十分の一税問題などのように、不徹底な改革と映ったことは間違いない。全般的な特徴としては、シャフハウゼン市参事会主導の教会改革がかなりの程度進展したことが挙げられる。つまり市参事会

にとって、1524年の時点では宗教改革を導入するための切迫した必要性が著しく低下したのであった。これは、中世から続いてきた旧都市領主と都市の対立、宗教的権威と世俗権力の確執において、権力バランスが崩れ、後者の方に傾斜した際の決定的な転換点の一つと規定できる。従って、宗教改革を導入すべきかどうかという問題においては、旧アラーハイリゲン修道院を中心としたカトリック教会側の意向をあまり考慮する必要性がなくなり、都市内での世俗的権力関係がより重要になったことは明らかである。メラー説とは異なり、このように市参事会の立場が強化されたことは、この都市の宗教改革の過程を考察する際に恐らく看過できないと思われる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 第72集
2. 論文標題 「研究ノート：ドイツにおける宗教改革と農村社会 ペーター・ブリックレの「共同体宗教改革論」をめぐって」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『キリスト教史学』	6. 最初と最後の頁 104～123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 -
2. 論文標題 「ルターの戦争観と現代」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『宗教改革の現代的意義：宗教改革500年記念講演集』	6. 最初と最後の頁 119～160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 第88巻第1号
2. 論文標題 「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義 500周年に寄せて」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『史学』	6. 最初と最後の頁 71～80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20181200-0071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 第127編第11号
2. 論文標題 「書評：踊共二編著『記憶と忘却のドイツ宗教改革 語りなおす歴史 1517-2017 MINERVA西洋史ライブラリー 113』（ミネルヴァ書房、2017年）」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『史学雑誌』	6. 最初と最後の頁 83～90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 第21号
2. 論文標題 「書評：若松英輔著『内村鑑三 悲しみの使徒』(岩波書店、2018年)」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『無教会研究』	6. 最初と最後の頁 67～78
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 第1122号
2. 論文標題 「宗教改革と都市共同体 ベルント・メラール説をめぐって」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『思想』	6. 最初と最後の頁 24～45
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 -
2. 論文標題 「ドイツ宗教改革期における聖書と共同体」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『山本敏夫記念文学部基金講座2016年度「現代社会とキリスト教」聖書テキストと共同体』	6. 最初と最後の頁 29～42
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野々瀬浩司	4. 巻 第72巻6号
2. 論文標題 「宗教改革とオスマン帝国」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『福音と世界：特集 世界史の中で 宗教改革500年』	6. 最初と最後の頁 8～14
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野々瀬浩司
2. 発表標題 「近世スイス・シャフハウゼンにおけるアラールハイリゲン修道院の解散（1524年）について 宗教改革前史をめぐる一考察」
3. 学会等名 「2019年度広島史学研究会大会西洋史部会」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野々瀬浩司
2. 発表標題 「近世スイス・シャフハウゼンにおける葡萄栽培者ツunftの反乱（1525年）について」
3. 学会等名 「宗教改革史研究会・スイス史研究会合同部会」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野々瀬浩司
2. 発表標題 「近世スイス・シャフハウゼンにおける葡萄栽培者ツunftの反乱（1525年）について」
3. 学会等名 「第69回日本西洋史学会大会自由論題報告・近世史部会」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野々瀬浩司
2. 発表標題 「ルターの戦争観と現代」
3. 学会等名 キリスト教文化協会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 野々瀬浩司
2. 発表標題 「ドイツにおける宗教改革と農村社会 ベーター・ブリックレの「共同体宗教改革論」をめぐって」
3. 学会等名 キリスト教史学会・東日本部会（招待講演）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 堀越宏一編、野々瀬浩司他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 清水書院	5. 総ページ数 -
3. 書名 『侠の歴史 西洋史編下巻』	

1. 著者名 浅見雅一・野々瀬浩司編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 277頁
3. 書名 『キリスト教と寛容：中近世の日本とヨーロッパ』	

1. 著者名 野々瀬浩司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 280頁
3. 書名 『西洋史特殊 : 近世ヨーロッパの宗教・政治・社会 文部科学省認可通信教育・慶應義塾大学教材 』	

1. 著者名 新教出版社編集部編、野々瀬浩司他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新教出版社	5. 総ページ数 324頁
3. 書名 『新教コイノーニア34 宗教改革と現代 改革者たちの500年とこれから 』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「書評：永本哲也・猪刈由紀・早川朝子・山本大丙編『旅する教会 再洗礼派と宗教改革』」（新教出版社、2017年）：迫害され続けたマイノリティからみた宗教改革史 不寛容と移住の中での信仰生活」（『図書新聞』第3306号、2017年6月10日、3面）。

総合司会「ヨーロッパ宗教改革研究の今日的意義 500周年に寄せて」（「三田史学会大会総合部会シンポジウム」2017年6月24日：慶應義塾大学三田キャンパスに於いて）。

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考